

川村次郎・竹内孝仁 編集

義肢装具学

米本 恭三（慈恵医科大学リハビリテーション医学教室）

このたび、長年の経験をもたれ、この分野で指導的立場にある川村、竹内の両氏の編集により、「義肢装具学」が誕生したことは、大変時宜を得たものといえましょう。

義肢装具士に関しては、昭和 62 年に法律が制定され、翌年より国家試験が開始されています。また平成 2 年には理学療法士、作業療法士の教育内容も大幅な見直しが実施されました。これら専門職を教育するための新しいカリキュラムに沿った教科書は、養成校から、特に待望されていたものです。

本誌の特徴は、それぞれの執筆者が日頃よく取り扱っている分野について書いておられるため、わかりやすく、必要性に応じて内容に厚みがつけられている点です。義肢装具を製作する側にスタンスをおいていて、手技的な部分は必須な知識のみに簡略化されているのがわかります。

義肢編に関しては、各部分につき義肢の種類と構造、それぞれの特徴と適合、アラインメントや歩行を要領をよく述べています。続く切断者のリハビリテーションの項では評価と術前後のアプローチ、特に装着後の注意点や訓練の実際に十分な紙面を割いています。

装具編では、目的や原則に続いて、臨床上で使われる頻度の高い短下肢装具にはじまり、長下肢装具、膝および股関節装具、靴型装具、体幹装具と続いています。これらの装具が有する治療上の意義を機能解剖学的に解説し理解を助けています。そして採型モデルの要点にも触れ、上肢装具では図を利用して、構造とそれぞれの部分が持つ意味を説明しています。毎年新製品が誕生する車椅子については、代表的なものが写真で示されています。義肢装具については、写真では細かい点がわかりにくいことから、主にイラストを利用したのも理解を助ける本書の、良い点になってますが、何枚かの写真に明瞭さが不

足していたので、これらはもう一工夫する必要を感じました。

読者の注意を向けるための配慮として、随所に著者たちのビジョンや問題点、利点さらには一口メモが枠で囲まれて挿入されています。要点がつかみやすく、楽しみながら読むことができました。

項目毎の練習問題は、理解の整理と試験前のブラッシュアップに好都合でしょう。解答欄は正解番号のみの記載と、簡単な解説が加えられたものがあります。どちらか一方に統一し、解答を導くために読むべき頁を提示してはどうかと思いました。

元来、義肢は欠損した四肢を補填するもので、機能障害を軽減する装具とは本質的に異なるものです。作製するに当たっては、機能向上を図ると同時に、患者自身の心理面を考慮に入れ、受容の良いものが望まれます。特に義肢は患者にとっては血が通った体の部分であると考えるのが適切でしょう。したがって適合が良く、装着直後より患者の手足として良く機能するのは当然です。装着した患者の“具合がよい”という言葉聞いた時が作る側にとって最もうれしい瞬間でもあります。

通読した感想としては、患者の側にも立った、処方から装着までの心のこもる指導書であることを行間を通じて読み取ることができます。義肢、装具に携わる義肢装具士、理学療法士、作業療法士、学生達さらに看護婦、臨床医にとり、本書はわかりやすく、臨床上大変有用であろうと思います。座右の書として広く読んでほしいと願っています。この分野の実務を担当する者が、本書を通して義肢、装具の知識と理解を深め、明日の医療の向上につなげていくことを期待しています。付録の交付基準や JIS 用語の項も、実務上のわかりにくい部分をまとめてくれているので、良い参考になるでしょう。

（A B 判 頁 384 8,446 円（税込）1992 医学書院刊）